

「ん……」
燃えるような茜色の西日が、窓から差し込んでいます。
薬と花の匂いがある、狭い木造の個室。

そのベッドの上で、ルクスは目を覚ました。

斬られた胸には包帯が巻かれている。傷は浅かったらしい。

「ここは——?。」

「あ……。お、起きたのか!？」

「うわっ……!？」

近くで声がして、ルクスはびくっと跳ね起きた。

金髪の少女、朱の戦姫リーズシャルテが、すぐ側の椅子に座って、自分を見つめていた。
どうやらここは、学園の医務室らしい。

「き、傷は痛むのか? そ、その、この医師の腕は、結構いいはずなだけ——」

リーズシャルテは、どこか落ち着かない様子で、ルクスの顔を覗き込んでくる。

とても、心配してくれているみたいだった。

「……………」

ルクスは状況を把握した後、少し顔をうつむかせて、

「その——、ありがとうございます」

微笑とともに、そう言った。

「え…………?。」

リーズシャルテは小首を傾げて、ルクスを見る。

「僕なんかのこと、手当してくれて——」

「……………」

リーズシャルテは少しの間、意表を突かれたように目を瞬かせ——、

「ルクス。お前は謙虚か傲慢なのか、ちっともさっぱりわからんヤツだな。帝国の皇族は、

皆そんな感じだったのか?。」

「さあ? 僕は幼い頃、すぐに宮廷を追い出されてしまいましたし」

ルクスが苦笑すると、リーズシャルテは、「そうか」と小さく呟き、

「お、お前がああのお神獣に迷いなく向かっていったのも、それと関係あるのか?。」

どこかぎこちない口調で、そう続けてきた。

「え?。」

「普通の人間はできないし、しないぞ。汎用機竜一機で、お神獣に向かっていくなんて……。

何で、助けてくれたんだ? わたしのこと——」

どこか恥ずかしそうな様子で、リーズシャルテが聞いてきた。

「……ええっと、よく覚えてません」

ルクスは苦笑しながら、素直に答える。
「ただ、とっさに、僕がやるしかないと思って。妹によく怒られます。『兄さんはすぐ、思ったことを実行しちゃうって』」

困ったように言うのと、リーズシャルテは腕を組んで思案顔を見せた後、

「そっか。まあいい。わたしは面倒なことは考えない主義だからな。お前はわたしを——わたしたちを守ってくれた。それだけで納得しておこう」

「結構さっぱりした方なんですわ。姫様は」

ルクスがこちない笑顔を浮かべて言うのと、

「ああ、そうだぞ。わたしはとても、実力のあるものには寛大で、鷹揚なお姫様なんだ」

リーズシャルテは嬉しそうに、愛らしい笑みを返してきた。

彼女が少し前までルクスに抱いていた警戒と敵意は、すっかり消えてなくなったらしい。

幼いというより、純真無垢で正直な態度が、清々しかった。

「うんうん。なかなか使えるヤツじゃないか、没落王子」

と、どこか頬を赤らめて頷く姫君に、ルクスはほっと、安堵の息をつくくと、

「よし、ルクス。わたしはお前を全面的に信じよう。だから、約束を果たしてやる」

リーズシャルテはいきなり立ち上がり、そんなことを言ってきた。

「約束？」

「い、言っただろ？ わたしがお前に決闘を仕掛けた理由だ。アレを見られたからには、そのまま逃がすわけにいかなかったんだ。だ、だから——」

「あ。そ、その——すみません、全部見ちゃって。……でも、綺麗でしたよ？」

「お、思い出させるなアホ王子ッ！ わたしが言いたいのは——」

赤くなったリーズシャルテにタオルを投げられて、ルクスは視界を塞がれた。

失礼なことを言っちゃったのかな？

相変わらず、女の子との話し方はよくわからない。

そう思っつて、ルクスが目の前のタオルを取ると——、

「そ、その——、これだ」

信じられない光景が、目の前に広がっていた。

窓から差し込む夕陽の中で、リーズシャルテの肌が見えていた。

制服のブラウスを上まで捲り上げ、スカートをおろし、ほんの少しだけ、下着をずりさげ、

めくれさせている。

まるで、見て欲しいとでもいうように。

西日のせいだけじゃなく、目を逸らしたリーズシャルテの頬は、羞恥で赤く染まっていた。

西日のせいだけじゃなく、目を逸らしたリーズシャルテの頬は、羞恥で赤く染まっていた。

西日のせいだけじゃなく、目を逸らしたリーズシャルテの頬は、羞恥で赤く染まっていた。

西日のせいだけじゃなく、目を逸らしたリーズシャルテの頬は、羞恥で赤く染まっていた。

西日のせいだけじゃなく、目を逸らしたリーズシャルテの頬は、羞恥で赤く染まっていた。

西日のせいだけじゃなく、目を逸らしたリーズシャルテの頬は、羞恥で赤く染まっていた。

西日のせいだけじゃなく、目を逸らしたリーズシャルテの頬は、羞恥で赤く染まっていた。

西日のせいだけじゃなく、目を逸らしたリーズシャルテの頬は、羞恥で赤く染まっていた。

西日のせいだけじゃなく、目を逸らしたリーズシャルテの頬は、羞恥で赤く染まっていた。

西日のせいだけじゃなく、目を逸らしたリーズシャルテの頬は、羞恥で赤く染まっていた。

「……そういうわけだ。これがお前に、決闘を挑んだ本当の理由だ。あのとき風呂場で、これを見られたから——」

「……………」

幼さの残る体つきに、確かな成長の兆しを示す、少女の生々しい丸み。

その未成熟な美しさに、ルクスは完全に、目を奪われていた。

「な、何を黙っているっ!? 何とか言ったらどうだ!?!」

「つ……………! あ、あの、その——」

完全に我を忘れつつ、ルクスは考える。

そうだ。あのとき雑用をした酒場で教わった話術テクニクを使おう。

女の子を褒めるときは、まず、本人と服との相性を——。

「その、とてもよく似合ってますよ。その白い下着——」

「うわああああ!? アホかお前ッ!? ドエロ! 死ねッ!」

また失敗したよ! もうあそこで働いて得た知識は忘れよう……。

ルクスが後悔しているうちに、顔から火を噴いたリーズシャルテが、慌ててスカートを引き上げる。

だが、ルクスには、それ以外のものもしっかり見えていた。

「その紋章は……、もしかして——旧帝国の?」



「……や、やっと気づいたか？——ということば、まだ誰にも、このことは言っていないんだな？」

ルクスが頷くと、服を直したリーズシャルテは、椅子に座った。

黒い竜を象った、旧帝国の紋章。

その烙印がリーズシャルテのへその下、下腹部にあつたのだ。

「一体、どうして——」

「それはまだ教えられない。だけど、この紋章のことは、誰にも言わないでくれ。お願いだ。約束、してくれるか？」

「……………」

新王国の姫の身体に、旧帝国の印しるしがある。

裏切りの証か、あるいは血統の詐称まがしらばなのか。

確かに知られれば、あらぬ疑いを招きかねない事実だが、ルクスは疑問より先に、リーズシャルテのことが気になった。

口を噤んでうつぶむいたリーズシャルテからは、必死さが伝わってきた。

見逃して欲しい……ではなく、信じて欲しい。

そう、心で言っている気がした。

きつと——後ろめたい、単純な隠し事ではないのだ。

ルクス自身とて、そういう過去がある。

だからわかる。

この子にはたぶん、悪いところはない。

「大丈夫です。誰にも言いませんよ」

「本当か？ 誓えるか？」

「はい。僕の持つ、機攻殺剣ソード、デバイスに誓います」

ルクスは姿勢を正して、そつと頭を下げる。

それを見たリーズシャルテは、ほつと息を漏らし、笑顔を見せた。

「よかった。最初はあの決闘で、一度地下の牢屋に監禁してから、お前にいろいろと尋問するつもりだったんだが——」

「えー……えええええっ!？」

僕をボコボコにして医務室送りにしてから、監禁して問い質ただすつもりだったのか！

やっぱお姫様の発想じゃない。

結構大雑把だ、この子……。

「よし。ではこの件は一件落着だ。というわけで、お前には明日から、正式にこの学園に来てもらうぞ」

「あ、そういう話でしたね。元々は——」

学園長のレイイに依頼された、機竜整備士見習いの任務。色々あったけれど、ようやく本来の雑用仕事に戻る。

ルクスがそう、胸を撫で下ろしたとき、

「あ。ちなみに整備士見習いの雑用は解約させたからな？」

士官候補生の生徒として通ってもらおう。明日からお前は、うちの学園に、

「あ、はい。わかりました」

生返事で答えた数秒後、ルクスはその意味を反芻して、

「——って、えええええええええっ!？」

思わず、叫び声を上げる。

「じよ、冗談ですよね……? だって、僕はそもそも男——」

「そ、それと、わたしのことは級友らしく、『リーシャ』と呼んでくれ。これも約束だ」

どうやら、完全に本気らしい。

リーシャのはにかんだ笑顔を見て、胸の傷が、酷く悪化したような気分がした。